やまなし医療最前線

県立中央病院から〈271〉

がんゲノム医療「拠点病院」に 患者の治療 さらに推進

1876（明治9）年5月の開設以来、150年近く山梨県内の基幹病院として歩んできた山梨県立中央病院。今年4月、院長に就任した小嶋裕一郎医師は、がんゲノム医療、救命救急、人材育成の取り組み強化を挙げながら「職員が統合された『ワンチーム』となって、さらなる発展に努めたい」と抱負を口にする。

小嶋院長が意識するのは、患者のがんの遺伝子を調べて最適な治療を選ぶがんゲノム医療の発展。「県内のがん治療の中心的な役割を果たす」と強調する。

小嶋裕一郎院長

小嶋院長によると、がんゲノム医療を担う病院は役割によって「中核拠点病院」（全国13施設）、「拠点病院」（同32施設）、「連携病院」（同202施設）の3種類に分けられる。同院は4月、県内の医療機関では初めて、連携病院から拠点病院へと変更となった。小嶋院長は「拠点病院となったことで、遺伝子の分析と治療方針の決定が病院単独でできるようになった。今後も増加が予想されるがん患者の治療をさらに推し進めるきっかけになる」と意義を強調する。

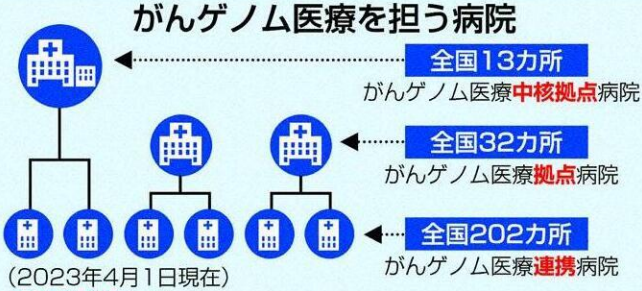
拠点病院選定のハードルは高い。同院は2013年にゲノム解析センターを開設し、国内でも先駆的にがんゲノム医療に取り組んできた。新型コロナウイルス対応でもセンターは検査体制の整備などで大きな役割を果たし、診療体制の維持につながった。小嶋院長は「そうした実績が評価された」と説明する。

県内唯一の3次救急医療機関でもある同院は、検査や手術を1カ所で行える「ハイブリッドER」の整備も進めている。検査や治療内容に応じて救急患者を動かす必要がなくなり、1分1秒を争う中で移動に伴う時間のロスを最小限にできるのがメリットだ。24年3月の完成、稼働を予定していて、さらなる救命率向上が期待できるという。

地方を中心に医師不足が叫ばれる中、若手人材の育成も意識している。「当院の特長として各診療科の垣根が低く、若手医師も先輩らに相談しやすい。経験をたくさん積んでもらえるように環境を整えたい」と話す。

＝第2、4木曜日に掲載します。

がんゲノム医療を担う病院



（2023年4月1日現在）

中核拠点病院

エキスパートパネル（遺伝子の分析、治療方針を検討する専門家の委員会）を自施設で開催できる。人材育成、治験、先進医療の主導、研究開発などについて、中心的な役割を担う

拠点病院

エキスパートパネルを自施設で開催できる。人材育成、治験、先進医療などについては、中核拠点病院と連携する

連携病院

中核拠点病院や拠点病院と連携してがんゲノム医療を行う

※がんゲノム情報管理センターのサイトを基に作成

掲載日：2023年05月11日／ぶんくら／紙面頁011
紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社